

螺旋運動としてのエスノメソドロジー

——“生きられたフィールドワーク”のラディカルな方法として——

好井 裕明

Recently there are renewal controversies about ethnomethodology within ethnomethodologists. In this paper, I take up the problem of “Garfinkel’s respecification” and “Pollner’s claim of radical reflexivity” from these controversies. Garfinkel clearly denies the reconciliation with professional sociology and “re-specifies” what ethnomethodology should be and what’s ethnomethodological topic and how ethnomethodologists do their studies. His expression is very difficult but his claim is very clear. Pollner says that “radical reflexivity” was prominent in early ethnomethodological studies but not in contemporary studies. What is “radical reflexivity”? It is “the recognition that all renderings of reality — including those of the social scientists — are contingent accomplishments” and it is the “vital resource for ethnomethodology and sociology generally”. Then he claims ethnomethodology should take back “radical reflexivity”. I agree him. I think that ethnomethodological inquiry is not so-called scientific work, it is a “lived spiral movement” between the inquired phenomenon and the “I-body” as an ethnomethodologist. Its inquiry will include the topics of ethnomethodologist’s work — how do I inquiry the “just this” phenomenon?, what resources do I use “tacitly” to do the ethnomethodological analysis? etc.

I show the concrete image of ethnomethodological inquiry influenced “radical reflexivity”. It focuses not only on everyday conversations and interactions but on the ethnographic details that transcend them. It is a radical ethnography of our own culture, and is a endless, “unsettling” political movement.

1. はじめに

ガーフィンケル (H. Garfinkel) がエスノメソドロジーを創始して以来、20 年以上がたつ。この間、会話分析 (conversation analysis)

を含め、膨大な量の具体的な分析が蓄積され、一つの歴史を作りあげつつある。そして、評価の是非はどうあれ現代社会学という建築物のなかでエスノメソドロジーは、一つの部屋を確保し落ち着いたかに見える⁽¹⁾。フリン (P. J. Flynn) は、この 20 年のエスノメソドロジー

Hiroaki YOSHII 広島修道大学人文学部

の歴史的流れを“運動”として捉え、世界各地で実践されてきた個別のエスノメソドロジ的研究、会話分析を詳細に検討し、その理論的含意や“運動”の意味を社会記号論的に解釈している⁽²⁾。またヒルバート(R.A.Hilbert)は、エスノメソドロジの批判は、パーソンズ機能主義社会学に直接向けられたのであって、ヴェーバー、デュルケムに代表される伝統的社会学が呈示した理論的関心とは相反することはない、と主張しエスノメソドロジを異端扱いするのではなく伝統的社会学の“正統な歴史”に組み込もうとする⁽³⁾。こうしたエスノメソドロジをいわば“外”から整理していこうという動きとともに、エスノメソドロジストたちのなかでもエスノメソドロジをめぐる論争が盛んである。この論争は、“外”からの整理に対するガーフィンケル自身の拒否宣言——エスノメソドロジの再特定化(respecification)論文——が大きく影響しているが、論争自体は彼の難解な表現に呪縛されることなく、エスノメソドロジスト各自がこれまでの具体的な研究実践にもとづいて自由に展開しつつある。その意味では、エスノメソドロジが、ガーフィンケルという“枷”からはずれ自由にその理論世界、実践世界を広げつつあると言えるのかもしれない⁽⁴⁾。

さて本稿で、このエスノメソドロジをめぐる内外の論争を詳細に検討する余裕は私にはない。その作業は、いま少しの時間的猶予をいただくとして、以下ではガーフィンケルのエスノメソドロジの再特定化、ポルナー(M.Pollner)のリフレキシビティ(reflexivity)をめぐる主張を概説し、そのうえで私自身が考えるエスノメソドロジ的調査実践のありようを“再特定化”したい。その場合、私の根本的な問題関心は“エスノメソドロジストが伝統的な社会学の秩序研究に対してまったく異質な研究関心・方法・理論を呈示していることは事実である。しかし、その

異質な研究を実践しているエスノメソドロジストはいったいどこに立っているのか?”という問いである。

2. ガーフィンケルの再特定化

ガーフィンケルは、アメリカ社会学会『社会的行為の構造』出版50周年記念シンポジウム(1987年)において、エスノメソドロジの再特定化(respecification)を行っている⁽⁵⁾。これはアレクサンダー(Alexander, J.)が、寛容にもエスノメソドロジに対してパーソンズ社会秩序論の枠内におさまるよう“和解の道”を呈示したことに対する拒否宣言であり、エスノメソドロジ的秩序現象とは何か、エスノメソドロジ的探究とは何かを明快に呈示したものである。

ガーフィンケルは『社会的行為の構造』には「構築的分析(constructive analysis)」の方法、理論化のポリシーが浸透しきっていると言う。「構築的分析」とは何か。彼はパーソンズ社会理論に限らず他の専門的社会学、社会科学にも遍在している分析手法、理論化作業を総称してこう呼んでいる。それは、「私たちが生きてある社会」を常に“修復する”手続きであり“修復された言説”としての科学的言説をその「社会」から遊離する手続きである。またそれは独自の科学的知的言説世界を構築する要請であるとともに、端的に言って「私たちが日常、そのなかで／またそれ自体を構成しつつ生きている〈今——ここ〉の社会」をまったく“見ない”ためのポリシーである。ガーフィンケルは、そのことを「活動の具体性(concreteness of activities)」と「分析的に与えられた行為(actions provided for analytically)」という言い方で区別し「構築的分析」が前者をその存立の前提として必要としながら、まったく忘却していることを批判する。

いわばパーソンズにとって「〈今——ここ〉

にある社会」がどのように編成・組織化されているかは、まったく関心の埒外であり、それをどのように合理的に説明し得るのか、そのための完結した概念構築、理論構築こそが主題であったのである。そして、前者の「活動の具体性」は、パーソンズにとって「けっして問われることがなく、なにかわからないがとくにわかる必要もない〔なにやら〕がいっぱいに満ちている壮大な空虚」であったのである⁽⁶⁾。

一方、エスノメソドロギーは「構築的分析」のポリシーを採用しない。そうではなく、そのポリシーにより隠蔽されている現実を「見よう」と試みる。ガーフィンケルによればエスノメソドロギーは「普段の社会における／普段の社会としての秩序現象の産出とその現象の説明可能性⁽⁷⁾」を明確に強調する。それは、〈今——ここ〉のなかで〈今——ここ〉として達成されている社会・秩序への徹底した注視である。まさにエスノメソドロギーにとっての秩序現象は「活動の具体性」にあり「〈今——ここ〉で編成される社会」なのである。そしてエスノメソドロギー的研究とは、この「具体的な社会」のなかで／「具体的な社会」として編成・組織化される秩序現象の様相そしてその説明可能性 (accountability) を常に〈今——ここ〉での具体的な活動とのリフレクシブな「螺旋」行程のなかで特定化していく実践なのである。

ところでガーフィンケルは「構築的分析」とエスノメソドロギーとの相違をさらに明確に表現するため、別の所で「解釈定理 (the rendering theorem)」という図式を呈示している⁽⁸⁾。

$$\boxed{\{ \quad \} \rightarrow (\quad)}$$

{ } は、「活動の具体性」の領域であり〈今——ここ〉で生みだされる自然で説明可能な秩序現象であり、常にある特定の個別のできごとをさす。→は、社会分析家の熟練された

方法的手続きをさす。() は、方法的手続きをへて構築された説明であり、それは常に「記号化されたオブジェクト (signed object)」となる。ガーフィンケルによれば、パーソンズにとって社会とは→という専門的な方法的手続きを媒介として構築される()なのであり、エスノメソドロギーにとっての社会とは{ }なのである。そしてエスノメソドロジストは「エスノメソドロギー的無関心 (ethnomethodological indifference)」という方法⁽⁹⁾を用いることで{ }に分け入り、その秩序性をみいだすことができるのである。

ところで{ }の例としてガーフィンケルは{高速道路の車の波}をあげているが、今ひとつ理解しにくいのではないだろうか。これから私なりの具体的な例示を試みてみよう。それは{教員室で教員と事務職員が雑談をしている}である。これは、つい先日、非常勤をしている専門学校で「見た」できごとである。私は、午前の講義が始まるまで教員室の机に向かい、ボーッとしながら今書いている論文の構想を頭にめぐらしていた。同じ部屋で専任の男性教員二人が談笑しており、事務職員の女性二人がなにか用事があるって教員室へ入ってくる。彼女たちは談笑の輪に加わり、ひとしきり談笑が続く。数分(だと思うが)の時間が過ぎた頃、別の非常勤講師が教員室へ入ってきて、ほぼそれと同時に事務職員の女性たちは談笑をやめ、教員室から出ていったのである。ただそれだけの日常的な光景であり、考えてみればそれまでその教員室で幾度となく「見てきた」光景なのである。私は、その時まさに「ガーフィンケルの「解釈定理」をどのようにわかりやすく説明しようか」を考えていた。そして、この{談笑}をみて雷に打たれた思いがした。まさに今、私の目の前で展開している光景が{エスノメソドロギーの秩序現象}⁽¹⁰⁾なのだと。そのとき私はビデオを撮っていたわけでも会話を録音していたわけでもない。だからトランスク

リプトをもとにして、彼らのワークを詳細に呈示することはできない。しかし、中心に展開されるトピックの構成、相手への関心を示すまなざしの交錯、あるトピックが終了した後、関連するサブトピックを誰が呈示すればスムーズにその場は展開するかという決定への相互の身体的な関与、笑いの相互構成の様相、談笑自体を終息させる相互の関心のずらせかた、等々、明らかに彼らは談笑している〈今——ここ〉で{談笑}という秩序現象を相互につくりあげていたのである⁽¹¹⁾。もっとも興味深かったのは、非常勤講師の登場と同時的な{彼ら4人の談笑}の終息である。非常勤講師の登場は、教員の一人が新たにトピックを呈示するのとほぼ同時だった。職員的女性たちは、ほとんど驚くこともなく講師に「おはようございます」と挨拶し、教員室からゆっくりと出ていったのである。一見すれば講師の登場で談笑が中断したように見えるがそうではない。{談笑}という秩序現象のなかで、その現象自体をどのようにして、いつ終えるのかを彼らが相互にモニターしながらつくりあげ「そろそろ{談笑}を終えようか」ということを相互に説明可能にしていたのであり、そこへたまたま講師が登場したわけである。恐らくこの終結のワークは、笑いの相互的な構成、トピックへの関心の呈示の仕方の変移など、具体的な彼らの活動を詳細に見ることで例示できよう。

そして、この{談笑}は、私が以前に見た{談笑}とも、これから見るであろう{談笑}とも、まったく異なるものだ。まさに〈今——ここ〉で編成されるものごとなのである。

ところで、この{談笑}を見ていた私は、いったい、その時“どこに”いたのであろうか。はじめに述べた問いに絡めながら、次に進むことにする。

3. ラディカルリフレクシビティ(radical reflexivity)という揺らぎ

確かにガーフィンケルが呈示した「解釈定理」により、エスノメソドロジーが何を秩序現象と考えるのか、伝統的な社会学の分析手続きや言説とエスノメソドロジーがどのように異なるのかは、明快となった。しかし「エスノメソドロジー的無関心」あるいは「エスノメソドロジーの問題」(山崎敬一)として{秩序現象}に分け入り、その様相を記述するとしても、何らかの方法的手続きをエスノメソドロジストはとらざるを得ず、その記述は→()とどのように異なるのか、という疑問が残る。言い方を変えれば、エスノメソドロジー的探究を実践する者は、エスノメソドロジストとして個別的な秩序現象とどのような関係にあり、また秩序現象の“どこ”に立っているのか、という疑問である。

この疑問は、会話分析の具体的な研究事例を読むほどに感じるものだ。特に、シュegloff (Schegloff, E.A.)を中心として行われてきたより一般的で自然な日常会話の特性や組織化の“装置”を記述する研究事例にそれを感じる。「会話至上主義」とでも呼べる信奉のもとで、分析をしている会話分析者のトータルな存在がカッコでくくられてしまうのである⁽¹²⁾。

こうした疑問を「リフレクシビティ(reflexivity)の問題」として最近のエスノメソドロジーの傾向に警鐘を鳴らしているのが、ポルナーである⁽¹³⁾。彼は、初期のエスノメソドロジーには、関連しているが別個のリフレクシビティの理解があり、二つのリフレクシビティが貫徹していたと言う。それは「内生的リフレクシビティ(endogenous reflexivity)」と「自己言及的なラディカルリフレクシビティ(referential radical reflexivity)」である。前者は「成員がある社会的リアリティの

中で、そのリアリティに対し、またそのリアリティについて行っていることがいかにして当の社会的リアリティを構成しているのか」「成員のある特定の状況の“知識”や記述が、その状況を組織する構成的な特徴として、当該状況に“立ち戻る”——これがリフレキシビティのもともとの意味なのであるが——こと」をさす。一方、後者は「あらゆる分析——もちろんエスノメソドロジーも含めて——が一つの構成的な過程であること」「成員だけが、当該状況を説明可能なように内生的に構成することに関与するよう運命づけられているのではなく、分析者であるエスノメソドロジストもまったく同様であること」をさす⁽¹⁴⁾。

前者が、当該状況と状況を構成する成員との前向きの絶えざる“螺旋運動”をさすのに対して、後者は、当該状況に内生的な“螺旋運動”とそのエスノメソドロジ的記述そして記述を实践するエスノメソドロジストの間で展開する“より広く深く錯綜した螺旋運動”のことをさしているとでも言えよう。

ポルナーは、二つのリフレキシビティを説明した後で、後者つまりラディカルリフレキシビティこそがエスノメソドロジー“らしさ”を象徴するものであり、エスノメソドロジーが“一つのリアリティ解釈”として存在する理由であることを論じている。ヴィーダー (Wieder, D.L.), シクレル (Cicourel, A.V.) ブラム (Blum, A.F.) マクヒュー (McHugh, P.) など、初期のエスノメソドロジーには、この“らしさ”が十分生きていたのである⁽¹⁵⁾。ところが現在主流となっている会話分析や科学的ワークのエスノメソドロジーは、内生的リフレキシビティの経験的研究が中心であり、ラディカルリフレキシビティは忘却されていると言う。そこでは当該状況における成員のプラクティスと状況との相互反映的なありかたが主題となるのみであって、それを記述し説明するエスノメソドロジストのリアリ

ティは問題とならない。より正確に言えば、会話トランスクリプト、ビデオトランスクリプトの作成といういわばエスノメソドロジーに特有の“専門的な”方法的な手続きをへることで、エスノメソドロジストは、自分をその作業の“外”に置いておくことが可能となり、エスノメソドロジストと彼／彼女が扱っている具体的リアリティとの“螺旋”の入口は“閉ざされる”のである。この内生的リフレキシビティの次元でエスノメソドロジ的実践をとどめておくとするれば、エスノメソドロジストは、自らの実践に“驚くことも”“不安になることも”“揺らぐことも”ない。いわば安定した自分の隠れ場所を確保できるのである⁽¹⁶⁾。

ところでポルナーは別の書物で「現世的推論 (mundane reasoning)」について論じている⁽¹⁷⁾。それは、世界が“客観的に、公的に、そこに在り”皆に共有されているという前提にもとづいた推論体系であり、「それは同一の世界についての諸経験が相互に分離する場合に生ずる問題に対してさまざまな解決策を提供する」ものなのである。私たちの日常世界は、一見安定した解釈で満たされているように見える。しかし現実には、いたるところで相矛盾したリアリティがせめぎあい、葛藤しあい、対立しあっているのである。たとえば彼は、交通裁判所におけるリアリティ分離、異なるリアリティの相剋 (交通事故で“いったい何がそこで起こったのか”をめぐる事故を起こした双方の経験や解釈がせめぎあい、裁判官の解釈ともせめぎあうことなど)を見て、さらに裁判というその場その時のプロセスのなかで“一定の解釈”が相矛盾しあう経験をおさえ、権威をもったものとして安定していく過程を考察する。そこはいわば「経験の政治学」のアリーナであり「経験の政治学」それ自体を達成するものこそが「現世的推論」なのである。

ポルナーにとって日常世界は「経験の政治

学」が実践される空間であり「現世的推論」の達成、維持、変移の様相を詳細に見ることがエスノメソドロジイの実践であり、彼にとってのエスノメソドロジイの探究対象は{現世的推論}なのである⁽¹⁸⁾。ポルナーは、エスノメソドロジイが社会生活を理解するうえで果たした貢献を次のように述べている。エスノメソドロジイは所与で明白で自然だとみなされていることについて深い疑い (a deep wonder) を生み出す力を与え、その疑いの態度を人間諸科学のディスコースや実践にまで広げた、と⁽¹⁹⁾。そしてこの“深い疑い”や“常に自らのリアリティに立ち戻る驚き”を生み出す根源としてラディカルリフレキシビティを主張したのではないだろうか。彼は、ラディカルリフレキシビティこそ、つまり「すべてのリアリティの解釈 (all renderings of reality) は、社会科学者の解釈も含めて、常に達成されつつあるもの (contingent accomplishments) である」という主張こそが、エスノメソドロジイそして社会学一般にとって必要不可欠なリソースであると述べているのである⁽²⁰⁾。

4. 具体的事例分析の検討 — ある一つのケース —

さて、ここまでの議論はしばらく横に置いて、この節ではエスノメソドロジイの具体的な事例分析を検討してみよう。それは、皆川満寿美氏の、ある共同作業所におけるフィールドワークをもとにした「「無関与」の協働的達成」という分析である⁽²¹⁾。皆川氏はこの論考の他に「「ホームルーム」(共同作業所における): トランスクリプト」という論考も同時期に執筆しており、あわせて検討することにしよう⁽²²⁾。

皆川氏は、他の二名(檜村志郎・藤村正之)とともに、ある知的障害者の共同作業所に三週間フィールドワークを実施している。これ

は「施設内生活」の社会秩序のエスノメソドロジイ的研究という目的をもつ。

「この研究は、制度的場面 (institutional setting) に対してエスノメソドロジイ的に接近してみたいという関心から行われた。施設内で発生する出来事が、まさしくその施設内の出来事であるのはどのようにしてであるのか、そこに現象している出来事をまさにそれたらしめている『社会の組織化 (編成)』 (social organization) を、会話分析・ビデオ分析の技法を使って、少しずつつかまえていきたいと思う。⁽²³⁾」

「「無関与」の協働的達成」は、施設で、ある日の朝のホームルームでみられたできごとのビデオ分析である。以下では、その分析の評価を前提としつつ、エスノメソドロジイはどこに立っているのか、をめぐり論述したい。

ホームルームは、施設のスタッフと通所者との間で毎朝作業開始前におこなわれる日常的できごとである。分析では、ホームルームを構成する必要のない職員が、ホームルームがおこなわれている最中に、“無言で”その部屋へ入り、ホームルームの司会をしているスタッフの前を身をかがめて通りすぎ、自分の用事を済ませたあと、また部屋から出ていくというできごとが焦点化されている。論考では、当の人物のホームルームへの「無関与」が司会者の発話や視線のありよう、身体的動作、当の人物の同様の動作、部屋にいる他の通所者の同様の動作のなかで／また動作をとおして、協働的に〈今—ここ〉で達成されつつあること、当の人物の意志や動作だけで「無関与」がつくられるのではなく、構成メンバーの協働作業のなかで、その場そのときに達成されていくできごと (locally ongoing accomplishment) であることが、ビデオトランスクリプトとそれをめぐる丹念かつ執拗な皆川氏の記述をとおして呈示される。わたしたちは、それを皆川氏とともに“読む”こと

で、当該状況の“秩序化”の様相を特定化することができる。呈示されたトランスクリプトは、収録したビデオや会話録音をもとに発話の詳細、各人物の微細で具体的な身体的動作、視線の方向が、時間の流れのなかで同時に把握できるよう、見事に作成されており、記述とあわせて「無関与の協働的達成」が例証されており、エスノメソドロジーのポリシーを貫徹した見事な分析と言える。ポルナーの表現をかりれば内生的リフレキシビティの経験的研究の“優れたかたち”である。

私は彼女の報告を聞きながら、分析の面白さに刺激を受けると同時にいろいろな疑問がわいてきた⁽²⁴⁾。それは「共同作業所という『施設内生活』の社会秩序を見るときになぜ『無関与の協働的達成』であるのか」「『活動の具体性』(concreteness of activities)という点から考えて、作業所の〈今——ここ〉でホームルームをホームルームとして、理解可能で、説明可能で、報告可能にしている成員のワークは他にあるのではないか」というものだ。たとえば私は、ビデオトランスクリプトのなかにある「おはようございます」の集中的で連続的な生起が気になった。これは、ホームルームに遅れて入ってきた通所者が部屋のメンバーに対して挨拶をした部分である。より正確に言えば、その人は常時介助を必要とする重度の障害者であり、言語でのコミュニケーションは困難で、挨拶は介助をしている職員が“かわりに”発話したものである。皆川氏は、そのできごとにも言及しているが、分析のメインとはなっていない。この「おはようございます」をめぐる秩序形成は、ホームルームのなかでどのような位置をしめるメンバーのワークなのか。皆川氏に問うたところ、確かに重要だと思うが今回の関心とは異なるので、という応答であった。

明らかにここには{共同作業所のホームルーム}という秩序現象へのエスノメソドロジー的研究をおこなう者の志向の相違があ

る。もっと言えば、トランスクリプトを作成する作業のなかに／その作業をとおしてエスノメソドロジー的な秩序現象をどのように見ていくのか、のエスノメソドロジスト自体の情報の積極的な取捨選択というワークが具体的に“埋めこまれて”いるのである。それは共同調査者である檜村氏の「エスノメソドロジー研究会」における発言からも明確である。彼は「ビデオを見ながら、どこまでの身体的動作をトランスクリプト化するかが非常に難しい。ちょっと肩をある方向に向けることも関与を示していることにもなるし、そのような微細な部分にこだわり、最初、トランスクリプトをどう作るか、困った」という趣旨を語っている。この発言は、率直な告白であるし、私自身の経験からしても納得する。そしてきわめて興味深い指摘である。つまりトランスクリプトに載せられたもの以外に、様々な発話や身体的動作が{秩序現象}には存在し、{共同作業所のホームルーム}のエスノメソドロジーを志向する者にとって、(そのエスノメソドロジー的な記述をしている段階において)“理解可能で、説明可能で、報告可能でない”その意味で“見えていない”具体的活動が{共同作業所のホームルーム}に“満ちている”と言えよう。

皆川氏はもう一つの論考でそのことを端的に述べている。

「また通所者の中には、重度の障害のために、口頭でのコミュニケーションが不可能な人が含まれているし、(訪問者である私たちには)ことばとして聞き取ることが困難な音声を発する人が含まれている。こうした音声は、場合によっては制止されることもあるが、この施設ではかなり頻繁に発せられていて、いわば作業所に特有の『音風景』を構成している。トランスクリプトを作成する上で、こうした音声をどのように扱うかは重要な問題であるが、今回は、訪問者である私にとって発話として聞き取れると判断されたもののみ

を、書き起こしてある。⁽²⁵⁾

そして、このエスノメソドロジストのワークは、ポルナーのいう「現世的推論」に囚われているのである。より正確に言えば、フィールドワークのなかで彼／彼女自身が言語的にも身体的にも感性的にも得てきた“新たなエスノグラフィックな情報”——たとえば、自分たちには「理解できない音声」「奇声」であるとしても、そうしたできごとが施設の中で、成員たちが“じゅうぶん理解可能な”できごととして、あるいは“特に驚くこともない、普段の、よく見られる、あたりまえの、特に関心をひくこともない”現象として達成されている様相が、具体的な発話や相互行為という“他者に見える”形でビデオデータや会話録音に“残存”していないとしても、分析者たちは、フィールドワークのプロセスで何かを感じとっているはずである。その意味で{具体的な社会}のエスノメソドロジ的探究は、それ以前にすでにエスノグラフィックなワークなのである——とエスノメソドロジスト自身が囚われている「現世的推論」が、その段階でのエスノメソドロジスト自身の知的関心の醸成と具体的なトランスクリプトを作成するというワークの達成のなかで“せめぎあう”のである。

皆川氏は、その“せめぎあい”を「訪問者である私」と「作業所に特有な『音風景』」という形で“とりあえずの解決”を呈示する。しかし、これはあくまで、この分析をしている“その場そのとき”の段階での解決であり、今後新たな分析が続けられるなかで、異なる解決が見いだされることになるだろう。たとえば、今の段階では「理解できない音声」「奇声」であるものが、作業所のなかで「かなり頻繁に発せられる」のはどのようにしてなのか、あるいは、そのような発話を作業所を構成しているメンバーがどのようにして「音風景」として達成しているのか、こうした関心とエスノメソドロジ的探究をとおして{共同作業

所}という秩序現象をより詳細に見ることができるはずである。

そうした作業をエスノメソドロジストが実践するとき、すでに内生的リフレキシビティの経験的研究という次元は超えてしまっている。つまりその次元で保っていたエスノメソドロジストを「透明人間」にする“術”は解かれ、新たなトピックの渦にエスノメソドロジストは巻き込まれることになる。それは、{具体的な秩序現象}のエスノメソドロジ的实践を達成している「現世的推論」というトピックである。このトピックをエスノメソドロジストがさらに探究していくとき、彼／彼女自身の「現世的推論」が解体、再編の危機に晒されることになり、知的実践自体も“揺らいでいく”。そしてこの“揺らぎ”こそ、ポルナーのいうラディカルリフレキシビティがもたらすもっともおもしろい効果なのである。

ところで、皆川氏たちの「施設内生活」の社会秩序というエスノメソドロジ的研究の今後の成果に期待したい。彼女は、今一つの論考で「施設内生活」の特徴として、次の5つをあげている。第一に、施設内の時間は、つねに「今は何かの時間」であり、「何でもない時間」「何もしていない時間」というものはない、ということ。時間と同様、空間も発生する出来事に関して分化していること。第二に、施設内では、成員はつねに「共在 (co-presence)」の状態を続けること。「職員であれ通所者であれ、この施設に通勤してくる人々は、朝玄関に足を踏み入れた瞬間から、退去するまでのあいだ、相互に身体的に近接しつつ自らの仕事を遂行してゆくということ」。第三に、この施設を訪れる人々はカテゴリー的に把握されうること。「職員」「通所者」「ボランティア」「保護者」等々。そうしたカテゴリーのセット間に多様な意味が達成されているということ。第四に、カテゴリー間の関係には、サービスの授受とみなされう

るものがあるということ。第五に、通所者である障害者に対して「仲間」というカテゴリーが使用されるということ，である⁽²⁶⁾。こうした特徴は，彼らがフィールドワークをするなかで，得てきた情報から整理しなおしたものであるが，まさに「施設内生活」という言葉の{施設}の具体性をエスノメソドロギー的に探究するうえで貴重な指針となるものばかりである。

5. 螺旋運動としてのエスノメソドロギー

ふたたび議論にもどろう。これまでの議論で以下のことが明らかである。つまりエスノメソドロギーは，そのポリシーを貫徹させエスノメソドロギー的な秩序現象を〈今——ここ〉において／〈今——ここ〉として探究すればするほど，その探究を全体として達成しつつあるエスノメソドロジストのワークは〈今——ここ〉を超え，溢れだしていく。それは，エスノメソドロジストが“エスノメソドロギー的探究を実践する人”であると同時に“「現世的推論」の囚われ人”であるからだ。それはまた，エスノメソドロジストが，自らの存在を「探究の舞台」から自在に消したり出したりできる“魔術”としての科学的手続きの胡散臭さに嫌気がさし，それを投げ捨て，エスノメソドロギー的現象を発見した後，自らの身体がエスノメソドロギー的探究におよぼす影響や逆にそれが自分の身体におよぼす影響という執拗な“螺旋”に巻き込まれ，その“思いがけない深さ”に魅力を感じるからだ。{具体的な秩序現象}のエスノメソドロギー的探究から端を発する「現世的推論」からの解放は，エスノメソドロジストに“快い眩暈”を引き起こすに十分なのである。しかし“快い眩暈”にいつまでも浸ってはいられない。はたして「現世的推論」からの解放はどのようにすれば可能であろうか。“螺旋運

動”の終わりは，どこかにあるのだろうか。

「日常の自明視されたプラクティスへの関心をとおして，エスノメソドロギー的探究は，生活のドミナントな形式を構成し拘束する諸特徴を超越しようと試みる。そうして明らかになる現世的推論のエスノメソドロギーは，構造的歴史的過程から考えるために，ふたたび社会学に帰還しなければならない。なぜなら現世的推論は，人々のローカルなワークの産物であるばかりでなく，よりロングタームでラジスケールなダイナミクスによっても形づくられるからである。⁽²⁷⁾」

ポルナーはこのように述べ，一つの可能性を「現世的推論」の文化的歴史的的研究に見ようとする。そして彼が，ラディカルリフレキシビティを用いた具体的研究例としてあげているのが，エリアス(Elias, N.)『文明化の過程⁽²⁸⁾』である。私は，ポルナーのラディカルリフレキシビティこそがエスノメソドロギーにとって不可欠であるという主張にはまったく同意するが，この具体的な解決の方向性は承認できない。文化性，歴史性という問題を視野におさめるとしても，エリアスのような研究に向かうには“螺旋運動”を何度もワープしていかなければならないからだ。ではどうすればいいのか。

私が考え，実践しつつある一つの可能性は，「私」という「身体」の注視であり，「私」がかかわるワークの解読であり，「エスノメソドロギーはエスノメソドロギーである以前に，徹底した，その意味でラディカルなエスノグラフィである」という端的な事実の確認である⁽²⁹⁾。

人類学者，民族誌家であるモアマン(Mor-eman, M.⁽³⁰⁾)は，DARG(Discourse Analysis Research Group)の第一回国際会議(1989年，カルガリーで開催)における講演で，エスノグラフィをめぐり語っている⁽³¹⁾。その内容は私にとってきわめて響きあうものである。私の主張を代替してもらおうという意味も

こめて、少しまとめておきたい。

まず彼は「実際のコンテキストで生起することの細部を重視すること」「われわれ自身も自然な世界の一部であることの自覚」「観察するために、対象の外側に立つことができない自覚」「われわれは研究対象に共鳴し、影響を与え、かつ影響を受けているという自覚」を確認し、エスノグラファーの身体について「ある場面に対してわれわれが与える影響は、魔法を使って償わなければならない誤りでもないし、否定されるべき当惑でもない。そうではなく、それは、まさに研究されるべき現象の一部なのである。われわれの参加は常に何かを引き起こす。エスノグラファーはその何かを研究しなければならないのである⁽³²⁾」と述べている。モアマン自身、タイで会話分析的な手法を応用した人類学のフィールドワークを試行しているが、そうした実践での経験から、会話分析は、それをすることがゴールではなく、あくまでエスノグラフィックな知識（メンバーの知識）のレリバンスのなかで分析のプロセスとして意味をもつことを主張する。そのうえで彼は会話や言語の限界を確認し、相互行為者が「身体」をもっている点に注目するのである。そしてモアマンは、会話や言語を超えた“共同性”とでもいえる何か、「ときに言葉もなく、不思議にもわれわれをひとつにつなぎとめる、共通の焦点や感情をもったコミュニオン⁽³³⁾」までも探究の視野におさめ得る研究を志向するのである。

もちろんモアマンの主張をそのまま私のものだということはできない。しかし、彼の語りを読むとき、明らかにエスノメソドロジの“螺旋運動”のなかで“揺らぎながらも”その“揺らぎ”にここちよいリズムを与えようとしているポリティカルな姿を感じとることができる。そして、そのリズムを与える契機が「身体」への注視なのである。

モアマンは、ガーフィンケルと並び立つエスノメソドロジ、会話分析の始祖である

サックス (Sacks, H.) は「われわれ自身の文化のラディカルなエスノグラフィ (a radical ethnography of our own culture)」を求めていたと述べる。そのとおりである。エスノメソドロジを志向する者は、エスノメソドロジ的秩序現象の記述に精を出す以前に、なによりもまずエスノメソドロジストとしての「私」をも巻き込んだ錯綜したリアリティの“螺旋運動”のなかで、それ自体を詳細にかつ執拗に見ていく「ラディカルなエスノグラファー (a radical ethnographer)」であるべきなのである。

注

- (1) これは、あくまで世界的なレベルの話である。日本の社会学界においては、エスノメソドロジという名前は浸透したものの、社会問題へのエスノメソドロジ的事例研究や会話分析など具体的な分析の蓄積はまだ不十分であり、これからという段階である。
- (2) Flynn, P.J.: *The Ethnomethodological Movement; Sociosemiotic Interpretations*, Mouton de Gruyter, New York, (1991).
- (3) Hilbert, R.A.: *The Classical Roots of Ethnomethodology; Durkheim, Weber and Garfinkel*, The University of North Carolina Press, (1992).
- (4) この論争は、アメリカのボストン大学を中心として行われている。その最新情報を入手し、ガーフィンケルの未公刊初期草稿など積極的に収集しその内容を検討しつつエスノメソドロジ論争の学説史的動向を日本に紹介しているのが水川喜文氏である。彼は論争の中心であるリンチ (M.Lynch) の主張に依拠し、リンチの会話分析批判論争、ガーフィンケルの1960年の初期草稿「パーソンズ・プライマー (Parsons Primer)」に書かれた「解釈定理」の原形ともいえる論述を紹介しつつ、エスノメソドロジの創始から現在までの動向を「プロト・エスノメソドロジ (proto-ethnomethodology)」「会話分析」「ポスト分析的エスノメソドロジ (post analytic ethnometh-

- odology) = プラクシオロジー」と分けている (水川喜文「ポスト会話分析のエスノメソドロギー——ガーフィンケル・分析哲学・パーソンズ——」第64回日本社会学会大会一般研究報告要旨 (発表当日に会場で配布されたもの), 1993年10月11日, 東洋大学を参照のこと)。水川氏が語るエスノメソドロジスト内部論争の最新情報, 学会報告を聞いていて, エスノメソドロギーも「学説」として研究されるにいったったのか, と妙な感慨を覚えた。
- (5) Garfinkel, H.: Respecification: evidence for locally produced, naturally accountable phenomena of order*, logic, reason, meaning, method, etc. in and as of the essential haecceity of immortal ordinary society, (I)-an announcement of studies. Button, G. (ed.), *Ethnomethodology and the Human Sciences*. Cambridge University Press, pp. 10-19 (1991).
- (6) ここでのガーフィンケルの主張を理解し整理するうえで, 山田富秋氏 (山口女子大学) との電話での議論や山田氏の近稿「シュッツ以降——エスノメソドロギーを中心として」(1994年刊行予定) が大きく参考になっている。記して感謝の意を表しておきたい。
- (7) Garfinkel, H.: *ibid.*, p.17 (1991).
- (8) Garfinkel, H. & Wieder, D.L.: Two Incommensurable, Asymmetrically Alterate Technologies of Social Analysis, Watson, G. & Seilor, R.M. (eds.), *Text in Context: Contribution to Ethnomethodology*. Sage Publications, pp.175-206 (1992).
- 解釈定理をどのように理解するのかについては, 前出の山田氏の近稿そして皆川満寿美氏の論考「エスノメソドロギーとマテリアリズムのあいだ——フェミニストD・スミスの場合——」『現代社会理論研究』第2号, 現代社会理論研究会 pp.11-22, (1992)。さらには第64回日本社会学会大会直後に開催された「エスノメソドロギー研究会」(お茶の水女子大学, 1993年10月12日)での山崎敬一, 檜村志郎, 皆川満寿美, 椎野信雄, 水川喜文, 佐藤裕, 山田富秋, 江原由美子, 各氏との議論が大いに参考になった。
- (9) この「エスノメソドロギー的無関心」という言葉はこれまで様々に不当な「誤解」を受けてきたが, 山崎敬一氏は, エスノメソドロギーが何に関心を向けたのかという視点から「無関心」の意味を積極的に整理し「誤解」を解こうと試みている (山崎敬一「ガーフィンケルとエスノメソドロギー的関心——リフレクシビティーと社会的組織化の問題, 佐藤慶幸・那須壽編著, 危機と再生の社会理論, マルジュ社, pp.333-351 (1993))。
- 彼によれば, ガーフィンケルやサックスがこの主張をしたのは「構築的分析」が「生きた個別の具体的な現実」を見ずに「修復する」実践に対して関心を向けたためであって, 社会学という学問に対する自己反省のためではない。彼らは, 伝統的社会学の「修復実践」(「解釈定理」でいえば→()の部分)には関心を向けないというエスノメソドロギー的関心を「EM的無関心」としたのである。山崎氏は「エスノメソドロギーの問題」として以下のように述べる。これは私のエスノメソドロギー理解とも響きあうものである。「エスノメソドロギーは『構築的分析』や『定式化作業』をまったく違った角度からみることで, すべての説明活動が組織化されていること, さらにそうした説明活動の組織化は場面の組織化と分かち難く結びついていることを見いだしたのである。そして説明の組織化と場面の組織化という視点から, 『定式化』や『構築的分析』を, 『人々の実際の社会学的推論活動』や『研究者の理論的活動』を, 同じ資格で研究の主題とすると同時にそれぞれ異なった仕方で組織化されているものとして, 実際の研究の対象にしたのである。」(山崎敬一: 同上, p.348)
- (10) ガーフィンケルの表現を借りれば, エスノメソドロギーの秩序現象とは「不断で, 普段の社会の, どこにでも見られ, ありふれた, 誰でもが知っており, 誰もがそれを避けることができず, 修正することもできず, それでいてほとんど関心がもたれていない〔街のワーク〕(immortal, ordinary society's commonplace, vulgar, familiar, unavoidable, irremediable and uninteresting 'work of the streets')」(Garfinkel, H.: *ibid.*, p.17 (1991)) である。

- (11) これは明らかに、サックス、シェグロフらが会話分析の成果として呈示してきた「順番取りシステム」「会話の終結の仕方」「隣接対」「トピックの構成」「相互作用としての笑い」などを例証し得る「秩序現象」と言える。
- (12) たとえばリンチは、会話分析には日常会話を特権的に扱う「根本主義 (foundationalism)」的傾向があり、「ある特定の能力のシステム」の分析を実証科学と同じような方法を使って分析しようとしている、として批判し、会話分析がその結果つくりあげている「実際に行われている会話」と「会話分析が記述分析する会話」との「距離」を問題にしている。(これに関しては、前出の山田氏の近稿の「3. 会話分析に対するリンチの批判」を参照してください。)
- (13) Pollner, M.: *Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity*, *American Sociological Review*, Vol.56, pp. 370-380, (1991).
- (14) Pollner, M.: *ibid.*, p.372 (1991).
- (15) Wieder, D.L.: *Language and Social Reality*. Mouton, The Hague, (1974).
McHugh, P., Blum, A.F. etc.: *On the Beginning of Social Inquiry*, R.K.P. London, (1974)
たとえば、ヴィーダーの研究は、彼自身が麻薬中毒患者矯正センターに入り込み、そこでのスタッフと収容者間での日常的な秩序構成をエスノグラフィックに、そしてエスノメソドロジ的に探究し記述したものである。そこでは、スタッフと収容者が互いに「理解可能で、説明可能で、報告可能な」ように、コードを具体的に語りあうことで日常的な秩序形成がされていることが示される。そして重要なのは、そのさいに、記述している私、観察している私がそうした〈今——ここ〉での秩序形成のプラクティスにどのように参加していたのかをも、論じられている点である。ポルナーは、その点を評価しラディカルリフレキシビティの実践と見るのである。(なおこの研究の中心部分は訳出されている。ローレンス・ヴィーダー「受刑者コード——逸脱行動を説明するもの」ハロルド・ガーフィンケル他(山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳: エスノメソドロジー——社会学的思考の解体, せりか書房, pp.155-214(1987)を参照)。
- (16) 実際、内生的リフレキシビティの次元にとどまっている会話分析やエスノメソドロジ的研究の文献を読んでも、私自身が少しも「ときめかない」ことを実感する。その場そのときに成員たちが構成する微細な秩序形成、秩序維持の様相を会話トランスクリプトやビデオトランスクリプトとともに詳細に解説されても正直「それでどうしたの」という感想が出るときがある。恐らく、こうした印象を受けてしまうのは分析者と私自身の関心の相違という次元の問題なのではなく、ポルナーの言うリフレキシビティの問題なのであろう。
- (17) Pollner, M.: *Mundane Reason*, Cambridge University Press, (1987).
- (18) この解釈は、リンチなど「正統派エスノメソドロジスト」にとっては承認しがたいものであるかもしれない。実際、今行われているエスノメソドロジストの内部論争では、ポルナーの位置はほとんど周辺か、あるいは外部に追いやられているようだ。しかし、私にとってきわめて納得がいくものである。
- (19) Pollner, M.: *ibid.*, p.ix (1987).
- (20) Pollner, M.: *ibid.*, p.370 (1991).
- (21) 皆川満寿美: 「無関与」の協働的達成, 現代社会理論研究, 第3号, 現代社会理論研究会, pp. 47-67, (1993).
- (22) 皆川満寿美: ホームルーム(「共同作業所」における): トランスクリプト, 微視的権力状況における会話分析, 平成2~4年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書(研究代表者: 江原由美子), pp.85-104 (1993).
皆川氏の二論考は、ぜひ読まれたうえで私の主張を聞いていただきたい。
- (23) 皆川満寿美: 同上, p.85 (1993).
- (24) 皆川氏は、この分析を先に述べた「エスノメソドロジー研究会」で報告している。私自身にわいてきた疑問等は、そのときに皆川氏に問いかけ、時間の制約などがあって不十分ではあったが、その場で議論している。そして、その時の皆川氏や共同調査者である檜村氏との議論が以下の論述のもとになっている。記して感謝の意を表しておきたい。
- (25) 皆川満寿美: 同上, p.91 (1993).

- (26) 皆川満寿美：同上，pp.86－89（1993）。
- (27) Pollner, M.: *ibid.*, p.xvi (1987).
- (28) Elias, N.: 文明化の過程（上）（下），赤井慧爾・中村元保・吉田正勝他訳，法政大学出版局，（1977），（1978）。
- (29) もちろん「私」に注目するからといって，自己を内側へ遡っていくという意味での反省作業ではまったくない。これは山崎敬一氏がエスノメソドロジーは「自己反省の社会学」ではないという主張と同様である。
- (30) 彼は，サックスの思想や会話分析に大きく影響を受け，その方法を自らの人類学のフィールドワークに応用している。その成果が次の文献である。Moreman, M.: *Talking Culture; Ethnography and Conversation Analysis*, University of Pennsylvania Press, (1988).
- (31) Moreman, M.: Life after Conversation Analysis; An ethnographer's autobiography, Watson, G. & Seilor, R.M. (eds.), *Text in Context: Contribution to Ethnomethodology*. Sage Publications, pp.20－34 (1992).（この文献の邦訳は「会話分析とともに」（藤田隆則訳）谷泰編『文化を読む』人文書院，（pp.296－321（1991））
- (32) Moreman, M.: *ibid.*, p.26 (1992).
- (33) Moreman, M.: *ibid.*, p.34 (1992).